図書館報

第十四号
昭和三十五年六月二十三日
発行所　福岡市西新町
西南学院大学図書館
発行人　山下和夫

図書館の矛盾

館長　木村毅

欧州ではそうでもないが米国では教授も学生も日本ほど書物をもたないと聞く。図書館が完備しているせいもあるがそれだけではないらしい。もともと書物に対する考え方が違うようだ。貧乏国日本ではめいめいがせつせと買い込んで、たださえ乏しい月給袋を空にしてフーフーいつている。笑いの止まらぬのは業者だけだとするとおかしなことである。大学にとつて図書は工場でいえば生産設備か原材料である。それを「従業員」がせつせと買うのはおかしい。さしあたりまだ大工道具の域を出ないのかも知れぬ。こんなことをいえば格別の愛書家でなくてもふきだすか怒るかするだろう。買うには買うだけの理由のあることを知らぬわけではない。しかし広い意味での生産手段が何らかの仕方でますます社会化していくのは歴史の必然ではないだろうか。歴史の流れに逆らうのは馬鹿気ている。だから大いに図書館を充実し、大いに図書館を利用すべきだということになろう。そう思いながら私もせつせと買い込んでいる。矛盾した話である。

ところで正直のところ私は学生の間余り図書館を利用しなかつた。それは一冊読むのにかなりひまのかかるものばかり読んでいたためもあつた。そして寝ても覚めても一つことばかり考えていたので、よくとんちんかんな返事をして家の者を怒らせた。こういう勉強の仕方では視野が狭くなり見解も片寄り勝ちだから少なくとも大学の普通コースの学生には余り勧められない。ただ先頃から来朝中の英国の世界的経済学者ヒックスが日本の若い学徒の質問ぜめにあつて、「君達は余り読み過ぎる」といつたと聞く。裏返していえば、「もつと自分の頭で考えなさい」ということかも知れない。すると図書館もそんなに利用しないでよろしいということになりそうである。図書館のPRとしては甚だまずいことになつた。

その埋め合わせのためというわけではないが、今の私は図書館を本当に有難く思つていることをいつておきたい。そう思うようになつたのは大学の教職についてからである。教職につけば、一方ますます研究を深める必要があると同時に、他方いやでも応でも広く調べないわけにはいかない。少なくとも社会科学の内部ではすべての学科が互にわかちがたくからみあつている。経済学もマクロ的分析の進展と共に会計学を単に企業会計のみの問題として無関心でいることはできなくなつたし、経営学も所得・消費・貯蓄・投資の流れを知らないでは景気変動のただなかに浮き沈みする企業のあり方を的確に摑むことはできないし、価値と剰余価値の意味や源泉についてはつきりした認識をもたないでは経営の労働政策に正しい指針を与えることはできない。その他の社会諸科学についても同様である。専門の研究者は好むと好まざるとに拘らず自己の専攻分野の内と外とに絶えず注意を向けないわけにはいかない。だから図書館が有難いのである。マルクスも大英博物館に日参しなかつたら、あれだけのものを書き上げることはできなかつたに違いない。だからといつて、大学図書館は学生のためより教師のためにあるといつては、手前勝手過ぎて甚だ申しわけないことになる。

ことのついでにいうと、わが国では大学図書館以上に公共図書館が貧弱である。また官庁や会社の図書館もそれに劣らず貧弱である。官庁で図書館の整つているのは中央官庁ぐらいのものである。会社でも調査課のある会社はよいが、それも課員が利用するだけで、一般社員には無縁のようだ。半期で数十億というような大きな利益金を残して税金をしつかり納めるのもよいが、どしどし図書を買つて社員に大いに勉強させなさいと勧めたい。そうすれば「学者先生」を招いて「御高説」を拝聴しなくてもたいていのことにはそれで事足りる筈である。諸君が幹部になつたときには是非そうして欲しいものである。代りに「学者先生」が干上がることになるかも知れないと思いながら、やはりそう勧める。これも矛盾した話である。矛盾した話ばかりしてまことに申しわけない。

（一九六〇・五・三）

大学図書館への改組なる

館内配置や諸手続きも大幅に変更

学院図書館がこの四月から大学図書館に改組された。これまで学院の綜合図書館として高校生や中学生にも広く開放されてきたのであるが、今後は教職員のほかは、大学の学生のみを対象とする大学図書館一本になつたわけである。学術研究への奉仕を第一義とする大学図書館の機能と目的をより充分に発揮させるためにとられた改革であることは言うまでもない。

大学図書館としての新らしい発足に伴ない、従来全開架制度から生じてきた若干の弊害を防止するために、玄関、受付、館内各室の大幅な模様替えを行ない、利用規則や諸手続きも相当変更になつたのでご注意願いたい。主な点では、

○携帯品は全て新設の携帯品預り所に預ける。

○雑誌室辞書室の新設（一階）、英文学閲覧室の移動（二階）

○貸出冊数の増加（平常でも二冊まで）

○延滞料の引き下げ（当分の試みとして五円）等である。

新入生のための読書案内

執筆者

中沢慶之助
古林輝久
猪城博之
台信達二
永嶋大典

経済学

受講者のために

本学教授　中沢慶之助

経済学が学問と言う大きな体系の中で、一つの地位を占めており、まず、社会科学が自然科学と方法論的にどんなに違つているか等の問題から、マクロ的な探究を始める。日本の経済学者も、こういう観点についての問題意識が十分であるとは必ずしも申せない。

中谷宇吉郎　科学の方法（岩波新書）。**高島善哉　社会科学入門**（岩波新書）。**拙稿「経済学的考え方**（大学論集五ノ二）。

テキスト基本「**経済通論**」は大体において、整序的方法をとるもので「近代経済学」の主流を汲むものであり、本書入門書としては大変優れていると認める。これを十分に読んで、その内容をよくそしやくすることが先決問題である。テキストより少しヴォリウムが大きくなるが、**中山伊知郎編、演習講座、「経済原論」**上下（青林書院）は内容が多彩で、日本経済の現実にも触れながら、原理的な解明にも力が注がれている。

理解的方法が、経済学の主流であるとするならば、その一派をなす、マルクス経済学にも目を注がねばならない。「資本論」を始めとして、**ソヴエト研究者協会、訳「経済学小辞典」**（青木書店）は、最近出版された解り易い辞引である。

経済体制について直視する学者の一人、**都留重人「経済を動かすもの」**（岩波新書）や、ケインズ体系をよく、まとめた、**デイラード、「ケインズ経済学」**（東洋経済）は、必読の書。資本主義経済体制を出来る丈け忠実に分析しつゝ、その歴史的過程を学問的に探究しようとしているからである。

経済学の思想史背景についても、無知が許されない。

堀経夫「経済思想史辞典」（創元社）は、座右に備えられるべきもの

日本経済については、汗牛充棟もたゞならぬほどの文献があるが

一橋学会「日本経済の分析」（春秋社）は簡単明瞭に説かれる処にミソがある。

尚辞典の中で

高橋泰三編「体系経済学小辞典」（東洋経済）は単に辞引としてより、一つのハンド・ブックとして利用価値をもち、内容もしつかりしている。

中山伊知郎編「経済学大辞典」（東洋経済）は望ましいものながら、三巻で八、一〇〇円とはチト高価に過ぎよう。

数理経済に興味をもつ者にとつては

アレン「数理経済学」上、下一、一六〇円（紀伊国屋）が評判がよい。

尚拙稿、**労働価値論**（大学論集四ノ二・三号）**労働価値論㈡**（商学論集三ノ三号）**ソシアル・インテグレーション**（商論一ノ一号）**マルクス主義とキリスト教**（商論一ノ二号）**完全雇用への道**（商論二ノ二号）**分業・投資**　**后進国**（商論三ノ二号）**貨幣と利子率**（商論四ノ二・三号）**経済の場**（商論五ノ三号）**労使人間関係論**（商論六ノ一・二号）**労働争議和解への道**（商論七ノ一号）等は、十分そしやくするまで読破しておくべきもの。

═経営学コースの立場から═

本学助教授　古林輝久

新入生の諸君おめでとう。多くの人々の中から貴方が選ばれて、今ここにおかれているということ、何んとすばらしいことではありませんか。すべては諸君の双肩にあることを思い、お互にしつかり励みませう。

学問するということは、頭でつかちな物知り博士に諸君をするということではありません。真実なるものを見、究めるということ自体人間行為の一面にすぎないのです。学問することは行為的な全的人間の形成にあるのです。この学と自治の殿堂たる本学院において、書物を通して多くの先覚者に接し、師と交り、友を語り、よりよき社会の形成のため諸君の情熱を燃して下さい。

さて、経営学コースよりの読書案内について一言申しましよう。経営学ブームなどといわれているにも拘らず、経営学は、いま学的体系化が少しづゝなされている若い学問なのです。これらを幾つかの学派に類別し得るとしましても決定的という程の定説はありません。したがつて、諸君は既成の考え方にとらわれることなく、出来る限り広い視野から読書をして下さい。社会科学についての一般的知識は教養過程で充分身につけておかれるがよいでしよう。

―社会科学入門、高島善哉著、岩波文庫。社会科学講座、弘文堂など。なお、経営学と特に密接な関係のあるものは、経済学ですから、その基本的知識の理解にはたえず意を用いて下さい。訳本でいいですから**A・スミス**位の原典は読んでおいて下さい。数学も心得ていれば便利でしよう。

社会科学はすべて理論、政策、歴史の三部門にわけることが出来ますが、それぞれ部門に入るまえに、一応入門的概論書を読むことが便利です。以下は戦后出版されて入手しやすいものに限りました。

経営経済学総論、池内信行著、森山書店。経営学概論、今村成男著、弘文堂。経営経通論、古川栄一著、同文館。経営経済学総論、山本、岡村、上林編、ミネルヴァ書房。経営経済学入門、グーテンベルグ著、千倉書房。

（／）
☆★☆★☆
（／）

教養のための読書

本学助教授 猪城博之

世の中にはいろいろの人がおる。それぞれその人の持ち味であるから、一概にその善悪は言えないが、教養のある人はやはり静かな落着きを湛えていて、奥ゆかしく感じられる。

教養のある人になるためには、読書が一番の近道である。書物を読んで栄養を取り、己の魂を太らせるのである。広く深く思うて、その魂を豊かにするのである。

書物を読むためには、先ず孤独に耐えて、静かに坐らねばならない。その静かさの中でこそ、先人の労苦が己の魂の奥底に響き、浸み透るであろう。

大学の学生生活は、世間に出て働くための最後の準備期間であり、一般教育課程は専門教育を受けるための準備期間であるとともに人間としての自己形成の期間でもある。この自己形成（＝教養）という目的のためには、哲学、文学、史学の人文系列の学科が大きな意味を持つている。各自その好みに従つて、そのうちの一つの学科目について読書に励むならば、それは人間としての深みを自己に与えることになるだろう。

世間に出て或る職場で働くときに、専門の知識と技能が強く要求されることは勿論であるが、その人の人柄や持ち味も大きな働きをする。このことを思えば、大学における一般教育課程の大切なこともよくわかる。

しかし、学科目に関係のあるものしか読まないというのは、少し味気ない。詩や小説や美術などのすぐれたものに接して、広く世間を知り、また自己の表現能力を涵養することも必要である。どんな職場であれ、正しく美しい言葉で話し、また書くことは、教養のある人に当然要求される一資格であるのだから。文芸作品に親しむことは、楽しさのうちに、こういう表現力を大いに養つてくれるだろう。そして、美しいものに接することは、私達の魂を高めてくれるのである。

近代生活と自然科学

本学助教授 台信達二

「ピーッ、ピーッ」と天来の信号音を発するスプートニク一号が打上げられたのは、二年半前の五十七年十月四日であつた。マスコミが名付けた「宇宙時代」の開幕である。それ以来、米ソ両国の打上げた人工衛星、人工惑星、月ロケットは約二十、失敗したものも合わせると、四十にもなるだらう。つい二、三日前ソ連は、スプートニク船に成功、人間の宇宙旅行に又一里塚をきずいた、めざましい進歩である。

マスコミは、現代を様々に形容する。原子力時代、第二次産業革命、技術革新、エネルギー革新、科学時代、テレビ時代、石油の時代、オートメーション、エレクトロニックス、ジェット機時代、機械時代等々、まことに目まぐるしいが、その側面の真実を語つているのである。

家庭の日常生活も、「オートメ夫人の三種の神器」といわれた洗濯機、テレビ、冷蔵庫から、ルームクーラーや自家用自動車に及ぼうとしている。物質生活に関する限り、戦時中とは比較にならぬほど豊かになつた。近代生活は、科学と技術の結合によつて、その様式が決定されるが、科学技術の進歩は、戦後特に加速度的となり、マスコミの名付ける、どの形容詞をとつても、劃期的と思われるものが、一度に重なつて来ているのである。そしてこの科学、技術の基礎に、物理学、化学がある。物質の構成要素である原子と、それの運動を規定する基本法則は、二十世紀の前半ではゞ完成を見た。肉眼で見ることは絶対に出来ない原子からエネルギーを解放し、原水爆にまで完成させたのは、理論（科学）と技術の輝かしい勝利であつた。このように、人間が極微の原子から、何億光年という宇宙のことまで理解できる一つの理由は、人間の大きさが、星と原子の丁度幾何平均になつていることである。

今後新製品なり新らしい物質なりを作り出すとき、偶然による発見といふケースよりも、望ましい性質をもつた物質を、理論的に作り出すといつた方向に向うであろう。

文科や商科系の学生諸君に望みたいことは、自然科学が工業、技術はもとより、現代思想にも大きな影響を与えていることに留意され、余暇に自然科学関係の書籍に親しまれることである。最近は難かしい数式がなくて論理的な道すじをたどれる良書が多く出版されている。又就職を希望する会社に関係ある産業や工業技術の概略を知ることも、必要だと思われる。

書物の名を一々挙げたら、きりがないが、開架式図書館の長所を利用し、三階の自然科学部門、二階の産業工業部門の書架に手を伸して、手に取つて見ていただきたい。岩波新書、クセジュ文庫にも諸君の期待を裏切らない良書が待つています。

尚、現代の成果を生み出した背景を知り、理解を深める点からも、科学史、技術史にも読書範囲を拡げられることを希望します。図書館には双書が教種類あります。

又自然科学的認識を、哲学的に或いは唯物論的に考えたい人には、その方向の書物もあります。動機は何れにしても、実り多き学生々活のために、自然科学関係の読書をおすゝめする次第です。

英語学、英文学へのしおり

本学助教授 永嶋大典

外国文学をタテに読むのが現代の学生の通念になつているのかも知れないが――そして、飜訳で外国文学を学ぶのを無意味だなどとは申さないが――願わくは四年間（それ以上かかつても結構）で英語ならばどんなものでもなんとか読みこなせる程度にはなつてもらいたい。そこで英語学を専攻する人は別として、英文学研究を志す人でも、昔から C. T. Onions : An Advanced English Syntax と O. Jespersen : Essentials of English Grammar は必読の書とされていた。しかし現在ではむしろ Curme : English Grammar (New York の Barnes and Noble 社から出ている。以前は Principles and Practice of English Grammar というタイトルであつたが、その後前記のように改められた。五〇〇円位。邦訳もある。「英文法――理論と実践」篠崎書林。なるべく原書をす

次頁につづく

本学に「図書館学」講座新設さる

――司書・司書補・司書教諭の夏期講習も開催――

今年から大学の講座の中に新らしく「図書館学」が設けられることになつた。「図書館学」という言葉は一般の人には殆ど耳慣れない目新らしいものであろうし、又幾らか聞きかじつたことのある人でも、その内容は？と問われると全く戸惑つてしまうに違いない。結局、常識的に「図書館を対象とする学問」とでも言いますか、とお茶を濁すのがオチである。

この点について何かはつきりした内容を与えてくれるものはないか、と図書館ハンドブックを覗いてみると、そこに「図書館学」の定義として次のようなことが書いてあつた。〃図書館学とは印刷又は筆写された諸記録を認識し、収集し、管理し、利用する知識及び練達である。〃と。何だか雲を摑むみたいで私にもよく分らないのであるが、色々の学者のご意見を拝聴すると、つまりそのような文化的社会現象を対象とする学問であつて、決して現実に行われている図書館活動の現象に対するものではないとのことである。すると初めに常識的に云つた「図書館を対象とする学問」ではないということになるらしい。

然し現在、図書館学の学としての可能性の問題は色々の方面から異論も多く、所謂「技術の綜合知」以上に出るものではないとの疑問も提出され、その学としての建設はなお今後の研究にまたれているわけだが、少くとも図書館が戦後急速に発展し認識し直されてきており、社会の中に、その要求に応える存在としての地位を確保して行きつゝあることは事実であり、その事実の前に、更に今後いかに進むべきかの指針を図書館は求めているのであつて、図書館学はまさにかような図書館の方向づけと目的とを示していくに違いないとは云えるであろう。

ところで、大学の講座の中に新たに設けられたものを紹介すると、文学部商学部の各自由選択科目として「図書館通論」「図書目録法」「図書分類法」「視聴覚資料」の計四単位と、司書教諭資格に関する専門科目として教職課程の中に「学校図書館通論」「図書の整理」（二単位）「図書以外の資料の利用」「学校図書館の利用指導」の計五単位とである。前者は一般の図書館専門職員としての司書の資格に必要な十五単位のうち基本的なものであり、後者は小中高校教諭となる人で学校図書館の管理運用を担当する司書教諭の資格に必要な単位である。将来図書館の業務に従事してみたいと希望している人は是非これらの単位を修得されることをお奨めする。

それと共に今夏本学で、司書・司書補・司書教諭の夏期講習が実施されることゝなつた。司書の方は大学在学中の学生には受講の資格がないのが残念だが、在学中の人でも短大卒の資格をもつ人は受講資格があるし、司書教諭の方は在学生（教職課程をとつている者）も受講できるから、百見は一聞にしかずとやら、受講されてみてはいかゞ。決して損にはならないと思う。

編集後記

図書館にとつて今年は随分画期的な年になりそうである。大学図書館一本への改組をはじめ、館内の一部改造、更に今夏は司書・司書補等の講習会も本学で開催される。我々も又、大いに励みたい。

前頁下段より

すめる。）を熟読するがよかろう。また、「英文法シリーズ」（研究社、三巻、四千円位？）を一度通読し、その後それを座右において、ことあるごとにひもとくならば、文法に関する問題は殆んど片づくだろう。音声学は必修課目であり、その方面に特別の興味を持つている人以外は講義だけで充分だと思う。それから英語史の講義はぜひ出席をおすすめする。英語史を学ぶことによつて英語の理解が立体的、有機的になつてくる。中島文雄著「英語発達史」（岩波全書、二五〇～三〇〇円位）は二五〇頁足らずのスペースの中に豊富な内容が盛り込まれていて外国でも類をみないぐらい便利な本である。僕自身の英語史に関する知識も結局この本一冊に帰着するようだが、ただしあの内容を真に身につけるには相当広い範囲にわたつての勉学が必要であろう。英語史入門としては、少し古いが、H. Bradley: The Making of English が今でも好評である。

以上は、はじめにのべたように、文学、語学のいずれを志すにせよ、英文科の学生に学んでほしい英語学のミニマムである。

次に英文学に近づくには、まずなんといつても作家、作品の名前と大体の傾向を覚えねばならない。そこで英文学史をひもとくことになるが、大和資雄著「英米文学史」（角川文庫）や福原麟太郎のものなど手頃だろう。分量も値段も大きくなるが、斉藤勇（タケシ）著「イギリス文学史」（研究社。一、二〇〇円）は日本語で書かれた英文学史としてはまず標準的なものである。そこでは活字の大きさによつて作家、作品の重要度（？）が示されている。そういつたやり方にはいろいろ問題もあろうが、初学者には一応便利でもあり、またそのまま英文学の読書指導の役をなしている。外国語で書かれた英文学史では、Legouis and Cazamian: A History of English Literature (Dent. 社一、〇〇〇円内外。著者は二人ともフランス人で従つて原典はフランス語。これはその英訳本。）を極力推賞する。また I. Evans: A Short History of English Literature (Pelican Books. 一五〇円位）はジャンル別の英文学史概説で通読に便利。

しかし文学史ばかりいくら読んでも仕方がない。代表的作品を次々と読んでおよそ各時代の見当をつけるよう心がけるとともに、誰か好きになれそうな作家を数人、なるべく早くみつけ出し、その人の全作品と標準的伝記、標準的研究書を読むがよい。（その具体的処方の一例として、A. Bennett: Literary Taste は是非読んでもらいたい。岩波文庫に訳本がある。二ツ星。）図書館は常にそういつた作品、研究書の充実に努力している。

最後に、学生諸君に強く訴えておきたい。教室での講義のみに満足しているような貧乏人根性をなげすてて教室外での自主的な勉学に情熱を燃やせ。本学の学生に最も欠けているのはそういつたファイトである。

（僕の興味からして話題が英語学、英文学に限られ、米文学、実務英語については触れなかつたが、いづれその方面の先生方から何かの折にお話しがあろうかと思う。）